ウェブサイト公開用

（様式 10）
（海外特別研究員事業）
平成 30 年 2 月 15 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長　殿

採用年度　平成 30 年度
受付番号　201860221
氏　　名　川村悠人
（氏名は必ず自署すること）

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地：　オックスフォード　（国名：　英国　）

2. 研究課題名（和文）サンスクリット言語論の原風景を描く—祭式学者、語源学者、文法学者の知的連関網

3. 派遣期間：平成　30 年　4 月　23 日～平成　31 年　2 月　13 日（ 297 日間）

4. 受入機関名及び部局名
オックスフォード大学東洋学研究科

5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意　書式任意（A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可）
（研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等）
（注）「6. 研究発表」以降については様式 10－別紙 1～4 に記入の上、併せて提出すること。

研究実施状況

本研究は、古代インドの語源学者ヤースカ（おそらく紀元前 5 世紀から紀元前 4 世紀頃）が自著『語源学』(Nirukta) にて展開するサンスクリット言語理論の全貌解明を目指したものである。具体的には、ヤースカが、名詞（*nāman*）、動詞（*ākhyāta*）、動詞前接頭辞（*upasarga*）、小辞（*nipāta*）というサンスクリット文を構成する 4 要素に対して展開する議論の包括的研究である。これまで様々な角度から『語源学』に挑戦する試みはなされてきているが、同書の曖昧模糊とした表現に理論の難解さも加わって、従来ヤースカの文法理論の研究は部分的にしかなされておらず、しかも個々の研究者が薄弱な根拠の上に、または特段の根拠なしに、自身の解釈を単に主張するにとどまっていた。本研究ではヴェーダ学とサンスクリット伝統文法学の両観点から、『語源学』の牙城に迫った。

『語源学』ならびに関連する古代のサンスクリット諸文献を厳密に読解、翻訳しながら、最も合理的と思われる解釈を導き出していくという作業が研究の基本となる。オックスフォード大学東洋学研究所において、授業期間であるか休業期間であるかを問わず毎週開催していた『語源学』読書会には、受け入れ研究者である Diwakar Acharya 教授をはじめとして、多方面から多くの参加があり、示唆に富む有益な議論を行なうことができた。研究開始から研究終了までの 10 ヶ月の間に、A4 判にして 65 頁にわたる訳注（英語および日本語）を作成することができ、これは今後の研究にとっても重要な基礎資料となる。将来的に、研究成果として翻訳研究を少しずつ公表していくことを計画している。

上記の作業と並行して、『語源学』にかかわる先行研究を再度注意深く精査し、重要と思われる事項をまとめていった。先行研究の中には現在入手が困難であるものもあり、残念ながら未だ全ての先行研究を収集することはできていないが、これまで集めたものについては一覧表を作成している（現在のところ A4 判で 5 頁からなる）。この表が完成次第、『語源学』研究の参考文献一覧表として公開することを企図している。先行研究を再度精読し、まとめていく中で見えてきたこともある。それは、従来の研究のほとんどが『語源学』に説かれる文法理論のみに焦点をあてたもので、ヤー

スカが著作の半分（『語源学』第 7 章から第 12 章）を割いて論じる—それゆえ彼の思想を探る上で重要と思われる—神々の名前の語源とその背景となるヴェーダ神学・ヴェーダ祭式学については、たった一つの例外を除いてまともな研究が存在しないことである。当初、本研究は難語の語源説明の前提として提示されるヤースカの文法理論の総合的研究を主軸に据えていたが、この文法理論に基づいて展開される神の名の語源学、そして神の名に込められた意味が描き出される中で見えてくるヤースカの神学や祭事学をも射程に収めるようにした。

さらに、『語源学』が注釈を施す対象である『用語集』(Nighaṇṭu) を電子テクスト化したことで、各語に対してなされるヤースカの語源説明を効率よく見渡すことが可能となった。

関係学会等への参加状況

研究実施期間（2018 年 4 月 23 日から 2019 年 2 月 13 日）中に参加した学会等は以下の通りである。

［学会］

1. Yūto Kawamura, ‘‘What is the Purpose of Restating *dā* in *Aṣṭādhyāyī* 5.3.19 *tado dā ca*?’’ 17th World Sanskrit Conference, University of British Columbia, Canada, July 9–13, 2018.
2. 川村悠人、「ヤースカの語源学における言葉の意味の位置づけ」、広島哲学会第 69 回学術研究発表大会、広島・広島大学、2018 年 11 月 3 日。
3. Yūto Kawamura, ‘‘Grammar, Etymology, and Magic: How to make a Ritual Formula Efficacious,’’ 9th Coffee Break Conference: Science and Technology in Premodern Asia, Wolfson College, University of Oxford, England, December 4–6, 2018. (invited presentation)

［シンポジウム］

川村悠人、「神の名の意味を知ること—神名アグニ（*agní*）の分析に見るヤースカの語源学と神学」、京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム—南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第 5 回公開シンポジウム「古典インドの哲学と学問」、京都・京都大学、2018 年 10 月 8 日（スカイプを通じて参加、堂山英次郎氏［大阪大学准教授（当時）］との共同発表）

［招待講演］

Noah's Ark in India: The Story of How a Fish Saves Manu from the Flood in the Śatapatha-Brāhmaṇa. Sanskrit Reading Room, SOAS University of London, England, May 16, 2018.

［出前講義］

An Introduction to Sanskrit Etymology. Visiting Lecture, SOAS University of London, England, December 13, 2018.

学会での成果発表状況と論文等の準備状況

1. 上記シンポジウムにて発表した原稿の加筆・修正版を雑誌『南アジア古典学』（九州大学インド哲学史研究室発行）に投稿予定であり、共同執筆者と最終確認の段階に入っている（題目「神の名の意味を知ること—神名アグニの分析に見るヤースカの語源学と神学」）。従来ヤースカは先代の語源説明法を整理し、体系化された理論を構築した人物と理解されており、確かに、彼は作品冒頭部の『語源学』第 1 章と第 2 章において彼の語源学の前提となる文法理論や方法論を描出している。しかし意外なことに、ヤースカが実際に見せる語源説明を前代（ヴェーダ時代）のそれと比べたとき、両者には具体的にどのような違いが見られるのかという根本的な問いは、未だに十分な明瞭性をもって答えられていない。本論文は、具体例の提示をもってこの問題を考察しようとする試みの一つであり、神名アグニ（*agni*「火、祭火、火神」）の語源解釈を例にとってヤースカの説明の諸特徴を洗い出し、そこに見られるヤースカの思想を彼の語源学の目的とともに探ったものである。雑誌『南アジア古典学』は 2019 年 7 月に発刊される予定である。

2. 上の 1 で述べた論文全体のうち、ヤースカによる神名アグニの分析法について先行研究とは異なる新解釈を提示する論文前半部をさらに深化させ、George Cardona 名誉教授（ペンシルベニア大学）へ捧げられる記念論文集に投稿した（題目: ‘‘How to Define the God of Fire: Fresh Perspectives on

Yāska's Etymology of *agní* ")。本論文集は Sanskrit Library を主宰する Peter M. Scharf 教授が中心となって現在編集中であるが、出版時期は未定である。論文中では、ヤースカが提示する二つのアグニ解釈が一つ一つ独立した無関係のものではなく、統合された形で対象全体の概念を形作るものであることを指摘している。このようなヤースカの方法論は、彼の語源学にはヴェーダ祭式学の伝統を思わせる要素が多くあることと合わせて、今後、仔細に吟味される必要がある。

ヤースカがなす神名アグニの分析は、祭式という枠組みの中で祭火という火神の本質を探ろうとしたものである。献供の火（*āhavanīya*）として設置されたときはじめて、アグニはヤースカが言うところの「神を地上に呼び寄せること」と「供物を運ぶこと」という主要な行為を果たすことができるという意味において、献供の火を設置する際に行なわれる「火の行進」儀礼（*agnipraṇayana*）の内容を軸としたヤースカの語源説明は、まさにアグニの根幹を捉えようとしたものと言うことができる。

3. 2018 年 12 月、ロンドン SOAS 大学の Lidia Wojtcza 博士から依頼を受けて、同大学の教員と学生を対象に、サンスクリット語源学に関する一般講義を行なった（上記［出前講義］を参照）。語源学の枠組みやヤースカが展開する理論について、それまでの研究成果をまとめるのに本講義を活用し、それらを噛み砕いて説明することで、参加者たちとの有益な知的交流も実現できた。講義で扱った内容は、以下の通りで、いずれもヤースカの語源学の根幹に関わる問題である。

・語源学とは何か
・サンスクリット語源学の伝統
・語源説明を必要とする語とそうでない語
・語源学と文法学の関係
・語源学を学ぶ目的

これらのうち、学界内ですらも特に周知されていないと思われる「語源学を学ぶ目的」を詳しく検討する論文を、雑誌『比較論理学研究』（広島大学比較論理学プロジェクト研究センター発行）に投稿予定であり、現在その三分の二を書き上げている（題目「古代インドにおける語源学学習の四目的」）。同雑誌は 2019 年 3 月末に発行される予定である。上の出前講義で扱った他の内容については、現在執筆中の著書（下記参照）の中に盛り込んでいる。

4. 2018 年 12 月にオックスフォード大学ウルフソン校で開催された第 9 回 Coffee Break Conference にて招待発表を行なった（上記［学会］参照）。発表では、祭事にて唱えられる祭文（*mantra*）がその効力を発揮して祭主の願望を叶えるためには、祭文を構成する各単語、特に祭文が対象とする神の名の語源的意味を知った上で祭文は唱えられるべきという思想が、ヤースカの語源学の底流をなすことを論じた。インドには古来より「文法と詩的伝統に則った正しい言葉の発語はその中身の実現につながる」とする思想があるが、いわばヤースカは、その言葉（特に神名）一つ一つの語源的知識をも言葉の内容の実現に不可欠と考えたものと思われる。祭式とは、讃歌や供物をもって神々を招来、歓待、満足させて、その見返りに望みのものを手に入れようとする営みであり、祭文は原則として神への呼びかけや神の名への言及を含む。ここに、神の名の真の意味を知って祭文を発するとき、その祭文は神を動かす霊力を帯び、神をあらしめ、神にその力を行使させるものとなるという呪術的思考が見えてくる。「～を知って～という祭式行為をすると、望ましい果が得られる」という古くからヴェーダ祭式学にて発達してきた発想にヤースカの思考法をあてはめると、「言葉（特に神の名）の語源的意味を知った上で祭文を唱えるとき、望ましい果が得られる」となろう。ヤースカが引くある詩節では、意味を考慮せずに言葉だけが読み上げられる祭文は、「火がないときの乾いた薪」に例えられている。乾いた薪とは湿ってない燃えやすい薪であり、いつでも燃える準備ができている薪である。しかし、肝心の火がなければそれが燃え上がることは決してない。古の見者が観得した祭文には潜在的な霊力があり、望ましい果を授ける能力がある。そのような祭文という乾いた薪を燃え上がらせてそれを正しく機能させるには、それを燃やす語源的意味の理解という火が必要である。この火を我々に授けるのがヤースカの役目である。本発表原稿は、若手の挑戦的で刺激的な論考を歓迎すると謳う *Sino-Platonic Papers*（ペンシルヴァニア大学発行）に投稿する予定があり、2019 年 3 月中を目処に、原稿を完成させるつもりである。

5. 2019 年 2 月 16 日に京都大学人文科学研究所にて開催される第 11 回ヴェーダ文献研究会にて「天

空地にいる三種の火神の名と役割」と題する発表を行なうことが決まっており、その後、適切な雑誌に論文として投稿する予定である。研究会用の発表原稿と雑誌用の論文原稿はいずれも完成している。その内容は、地上の祭火、中空の雷光、天の太陽という世界の三つの火を打ち立てて展開されるヤースカの火神論を概観した後、特に問題が大きい「中空の雷光」について、詳細に考察するというものである。ヤースカの神学では、この「中空の雷光」はジャータヴェーダス（*jātavedas*）と呼ばれ、彼はこの神の名の分析法として五種のものを提示している。それら一つ一つに込められた思想的背景やこの雷光の神が担う役割（雨をもたらすことか）などを論考の中軸とする。

6. ヤースカの『語源学』を中心に、語源学という学問、それと関連する文法理論、神々の名の語源解釈、そこから見えてくる様々な文化事象などを扱う日本語単著を準備しており、現在書き上げている分量はA4判で63頁である。

国際的な交流関係の構築と拡大

読書会、研究会、国際学会、招待講演などを通じて、国際的な交流関係を構築、拡大、強化することができた。Oxford University、SOAS University of London、Cambridge University、Hamburg Unversity、Shanghai Normal University などに所属する多くのインド学者、サンスクリット学者、言語学者と交流を持つことができ、いつでも連絡を取り合える状態にある（例を挙げると Diwakar Acharya, Elizabeth Tucker, James Benson, Marco Ferrante, Yuhan Sohrab-Dinshaw Vevaina, John Lowe, Lidia Wojtcza, Vincenzo Vergiani, Harunaga Isaacson, Victor D'Avella, Paolo Visigalli など）。とりわけ、報告者と同じくヤースカの『語源学』研究を推進している Paolo Visigalli 准教授（Shanghai Normal University）とは、第17回国際サンスクリット学会（2018年7月、カナダ）にて出会って以来、濃密な関係を構築している。Visigalli 准教授は上述の文献読書会にも欠かさずスカイプで参加してくれ、読者会後にもメールやスカイプでのやり取りを通じて、残された疑問点とその解決策などを深く掘り下げた。2019年9月、上海にて、ヤースカの『語源学』に焦点をあてた国際研究集会を開催すべく、現在 Visigalli 准教授と共同で準備にとりかかっている。同時に、ヤースカのヴェーダ神学を中心に扱う論文集の出版も計画しており、出版社候補の一つであるインドの Dev Publishers & Distributors と具体的な話を進めている。

所期の目的の遂行状況

研究実施期間が10ヶ月だったこと、および新たな諸課題が浮上したこともあって、当初2年で完了を予定していた研究計画の全てを終えることはできていないが、オックスフォード大学にて蓄積することができた資料と経験を礎として、今度さらに研究を深化、発展させ、積極的に成果を公表していく所存である。